

43 シディ・ブ・サイド (チュニジア)

人が建築と出会う窓口



●地中海世界のコンビネーション

シディ・ブ・サイドは、チュニジアの首都チュニスから20km程の海岸沿いの街である。チュニジアは北アフリカだが、地中海対岸のイタリア・シチリアとは最短で100km強、チュニスからでも200km程しか離れていない^{*1}。静岡県を横断する程度の距離である。この近さゆえに、古代からヨーロッパ側とは毎日のように交通していた。というよりも、ヨーロッパとアフリカという区分が確立する前から、この地域は地中海世界として共通の風土に生まれ、その遺産を生み出してきたのである。

建築のかたちとして、地中海世界の共通性を感じるのには、ひとつは古代ギリシア・ローマのデザインが日常的に建物の細部に見られることであり、もうひとつは石灰を塗って白いかたまりになった街が見られることである。このふたつのことは、スペインのアンダルシア、南イタリアのプーリア、ギリシアのミコノス、トルコのクシャダスなど、環地中海の各所で目にする。

シディ・ブ・サイドの隣街にカルタージュがある。古代ローマと地中海世界の覇権を争い、ポエニ戦争でローマに滅ぼされたカルタゴのことだ。ローマによる征服後、カルタゴはローマに次ぐ大都市となり、チュニジア各地に古代ローマの遺跡が多数残ることとなった。古代ローマの後には、アラブ世界の一部となり、オスマン・トルコなど支

配者を変えながらも、イスラーム教国として続いている。

遺跡を見なくても、チュニジアがローマ帝国の主要地であったことは、ごく普通の建物の入口やコーナーに立つ柱が、古典主義のデザインでなされていることから見て取れる。二千年来親しみ、当たり前を受け継がれてきた装飾なのであろう。そして、その柱の上には往々にして、北アフリカのイスラーム建築の特徴である馬蹄形アーチが白黒の縞をともなって載っている。ヨーロッパ建築の基本ともいうべき古典主義と、イスラームの馬蹄形アーチが、絶妙のコンビネーションを見せてくれること、これがチュニジアの建築を見るよこびのひとつである^{*2}。

●継ぎ目のない白い街

カルタージュは大都市チュニスと近いために、現在では郊外の高級住宅地や別荘地となり、大統領官邸をはじめ大使公邸が並んでいる。古代都市カルタゴの中心であり、ローマ時代にもフォルムが置かれた丘の上からは、古代の遺跡と高級住宅と、海と山とを一望におさめることができる。

カルタージュの家々が緑に囲まれた現代の一戸建てなのに対し、シディ・ブ・サイドは高台に築かれ、建物が壁を接して連続する地中海の伝統的集落である。壁は石やレンガを積んでつくられているが、モルタルで調整されて目地が見えず、そ



図1 チュニスのメディナ (旧市街) ポーチの柱は大小のイオニア式柱頭、その上に馬蹄形アーチ、奥に白黒縞のアーチとドア



図2 カルタージュの丘 手前に古代カルタゴの遺跡、その向こうに一戸建ての白い高級住宅が点在する

*1 距離、治安面ともにヨーロッパからもっとも行きやすいイスラームの国であろう。チュニジアへのヨーロッパからの飛行機は、チュニスとカルタージュやシディ・ブ・サイドとの中間に降りる。どちらにも10km程で便利だ。

*2 このコンビネーションは南スペインやモロッコでも見られる。

*3 胸元のアクセサリやベルトのバックルのようなもので、アクセサリの付けすぎを野暮と言うように、とりどりの色や看板だらけのなかでは、結局どのサインもメッセージを伝えない。

の上ありとあらゆる表面は白く塗られてそれ以外の色が使われることがない。そのためひとつひとつの建物の境界が外観からは判別できず、どこまでも連続する大きな白いかたまりとなる。あたかも街が継ぎ目のないひとつの巨大な建物のようにつくられているのである。それぞれのすまいは中庭を中心に構成され、道からはそこに通じるドアと格子で目隠しされた窓、そして壁を越えてはみ出した花々が見えるのみである。ちょうど大きな建物のなかにモザイクのように外部が内包されているわけだ。しかもシディ・ブ・サイドの街は山の起伏に沿ってつくられているので、陸屋根をテラスとして用いた立体的な景観となる。中庭とテラス、そして白いかたまりは、日射しの強い乾いた地中海性の気候が生み出した造形にほかならない。

●白のなかの青

街は外部に対して閉鎖的である。しかし、白い壁に穿たれた開口部とその上の庇は、どれも鮮やかな青に塗られ、ひときわ目をひく。白い壁のなかに大小の開口部がポコポコと散りばめられ、さまざまな意匠の持ち送りが庇を差し出す。特に中庭に通じるドアは、黒い鋳によって幾何学的な文様を施したり、ドアの枠だけ砂岩の地肌を残したり、見込み部分にタイルを貼ったりする。影のない白い表面に点在する青は、面積が小さいからこ



図3 シディ・ブ・サイドの街を見下ろす 街は白いかたまりとなって、ところどころにテラスがつけられる

●参考文献

①Hédi SLIM, Nicolas FAUQUÉ, LA TUNISIE ANTIQUE, MENGÈS, PARIS, 2001

②Guy de BOSSCHÈRE, SIDI BOU SAID, CÉRÈS, TUNIS, 2001

そ目立つ。そして、ここぞとばかりに単純だが細かいアラバスクの文様を繰り返す。それは、とても上品でかわいらしい装飾だ。シディ・ブ・サイドは、この白と青がチュニジアでもっとも美しい街なのだ。

装飾は建築における目のつけどころである。手がかりと言ってもよい。実際、世界のさまざまな建築を見ても、内外の視線が行き来する開口部のまわりや、はじめに建築に触れるドアノブなどは、もっとも装飾に注意がはられる部分である。装飾は人が建築と出会う窓口なのだ。そして、装飾は周囲がシンプルであればあるほど、その効果を発揮する。平滑な表面のなかにあってこそ、その輝きや凹凸が目立つのだ*3。シディ・ブ・サイドの白のなかの青は、建築における装飾と色の効果をこの上もなく簡潔に、鮮明に教えてくれる。



図4 シディ・ブ・サイドの街角 白い壁のなかに浮かぶ青い開口部。ドアや庇は特に装飾が凝っている。ブーゲンビリアが咲き乱れる